

MONTTO

岩手県立大学総合政策学部ニュース●第24号 2010.10.23

《総合政策学部 HP》 <http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/>

特集●大学院で学ぶ



オープンキャンパス



賑わう大学祭(2009年度)



深まるキャンパスの秋



調整池ピオトープ越しに見るキャンパス



大学生協売店



大学生協売店前の賑わい



アイーナキャンパスが入る盛岡駅前のアイーナ

CONTENTS

特集●大学院で学ぶ

寄稿「大学院修了こそ真の学卒か」

中村慶久 学長

おじゃまします

田中信孝ゼミ / 豊島正幸ゼミ

New Intelligence

渋谷晃太郎 教授 / 新田義修 講師

研究最前線

高嶋裕一

学部ニュース

チリ津波避難における住民の行動

西出准教授 学長表彰受賞!

岩手県立大学生協新設!

西和賀町湯本活性化プロジェクト

風のモント達

情報数理と政策①

「政策を学ぶのに、
なぜ数理が必要なの?」

アイーナ講座

岩手の地形①

「街並みに見える北上川の名残」

特集 ● 大学院で学ぶ

総合政策研究科という大学院が県立大にあるのをご存じでしょうか？ここでは総合政策学部の教員たちが専門的な研究を行う大学院生とともに、さまざまな課題に取り組んでいます。大学院生たちの取り組みを寄稿してもらいながら、大学院がどんなところかを紹介します。

● 大学院って何だ？

Aさん 県立大学には総合政策研究科という大学院があるんですよね？ どんな勉強ができるのですか？

B先生 総合政策学部同様、現代社会で問題になっているさまざまな事柄について、多面的な視点から、その解決策を考える研究ができるんだ。

Aさん 学部の勉強とは何が違うのですか？

B先生 学部では「教わる」ことが中心だけど、大学院では自分でテーマを見つけ、それについての「研究」が中心になるということだね。

Aさん ふーん。そうすると自分一人でいろいろ考えなきゃいけないですね。

B先生 そうだね。演習やゼミは、研究テーマについて、指導教員や他の教員と一緒に、文献解読を行ったり、フィールドワークに出かけたり、議論したりすることで進めていくんだ。こういう密度の高い指導を受けて、よりよい研究を行い、よい論文を仕上げているようになるんだよ。

Aさん それなら一人で悩まなくても済みますね。

B先生 それから、多様な専門分野の教員がいるので、さまざま

な視点から意見が聞くことができるというのも、わが研究科の特徴なんだ。

● 大学院の構成

Aさん 大学院には、具体的にどんな分野があるのでしょうか？

B先生 表に示したように、博士前期課程では五つの分野、一つのコースがあるんだ。法律や経営・経済、政策、地域整備、住民生活、環境など多岐にわたっていることが分かるね。

Aさん とてもいろんな分野がありますね。

B先生 とくに「公共政策特別コース」は盛岡駅前のアイーナにキャンパスを設け、平日夜間と土曜の昼間に授業を開講している、社会人の方でも勉強しやすくなっているんだ。

Aさん へえ。これなら社会人の

● 入学するには

方でも大学院に行きやすいですね。**B先生** さらに専門的な研究をしたい人のために、博士後期課程もあるんだ。こちらは研究者や指導的な立場になる人向けだね。

Aさん 何だかちよつと興味が湧いてきました。大学院に入学するには、どうすればいいのですか？

B先生 学部同様、入学試験があるんだけど、その前に、事前相談をしたほうがいいんだ。というのも、自分が研究したい内容と、教員の専門分野が一致していないと困るからね。これが学部の入試と一番違うところだね。

Aさん そうですね。研究が中心となると、相談も必要なんですね。

B先生 教員の研究内容や、入試の詳しいことはHPなどでも情報が得られるはずなので、アクセスしてみよう。

それから、次のページには現役の大学院生から進学した理由や、どのような研究を行っているのかコメントをもらったんだ。これを読むと、大学院のイメージが湧いて来るといえるかな？

Aさん なるほど。参考になりますね。

博士前期課程の構成

法・経済・経営政策系

現代社会の法 分野
経営・経済システム分析 分野

環境・地域政策系

地域変動と住民生活 分野
防災と地域整備 分野
生態・景観と環境管理 分野

公共政策特別コース

大学院修了こそ真の学卒か



学長 中村慶久

私が大学に残り、研究者になろうとは、全く想定外だった。大学四年の夏、就職希望の電子機器メーカーで工場実習をし、能力不足を痛感して大学院進学に転じた。

前期課程二年目の春休み、与えられた課題について実験と理論解析を進め、私なりに仮説を立てた。それが見事実験で証明され、教授室に飛び込んだ。このことが一〇年後に垂直磁化による高密度磁気記録方式の提案に繋がり、私の人生を決めた。その三〇年後、この方式によるHDDが製品化され、今では全世界で使われるまでになった。

私が学部卒で就職していたら、今の私も、垂直磁化による超大容量HDDも無かったかも知れない。学部の人にうつつを抜かし、大学院入試も危ぶまれた者が、大学院で大化けし、その後、企業や大学で大活躍している卒業生を何人も知っている。今や昔の学卒に代わって大学院修了が確かな肩書きになっている。

おじゃまします

田中信孝 ゼミ



テーマ選びは学生次第。大事な問題は問題意識

経済学の中でも、特に関心の高い財政金融が専門の田中教授。研究室のドアを叩く学生も、自治体財政や金融の研究志向が多い。だが「経済学の範疇で自分のやりたいものをやる」のが田中ゼミの流儀。まずは三次次に共同でテーマ探しをしながら興味のある方向を探り出し、卒論へと展開する。とはいえず、学生の問題意識が基準なだけに、結論そのものがなかなか見えてこないとか。それすら楽しむ素振りの田中教授だが、「問題意識が鮮明であればあるほどいい」とも。ちなみに今年の四年生、高橋幸利さん、菅野紘生さん、佐々木悠さん、須藤千晶さん、高橋亜友美さんの五人は市町村領域での分析が多く、一方三年生の権合麻美さん、寺嶋龍巳さん、吉田恵理香さんの三人は社会保障や金融とバラバラ。果たしてどういった結論となるかは「学生次第」と田中教授は下駄を預けるが、「先生は話しやすく相談もできる」と四年生が口を揃える。雰囲気こそ静かだが、誕生会や餅つき（！）など「課外活動」も多い田中ゼミ。「落ち込んでいた時に食事に連れて行ってもらうたり、本当に先生は優しい」と須藤さんは笑顔で話す。漂々静けさ穏やかさは、交流から生まれ、た揺るがぬ信頼関係の証なのだ。

大学院生の声①

公共政策特別コース
菊池 昌彦



授業中の様子

きましたので、その異常さを実感として持っています。

現代民主主義は、このような「不安」に基づく合意に対処することのほか、今目的問題として、縮小せざるを得ない行政サービスと市民ニーズのすり合わせが必要な状況で、行政と市民を結び合わせる回路となりうるか、が求められています。長くなりましたが以上が、私が大学院に進学した理由と研究の課題です。

私たちの生きる時代はリオタールの言葉で言えば、皆が共通した認識を持たない「大きな物語」が終わり告げられた後の、無数の個人が無数の物語を生きる「小さな物語」の時代です。私は「小さな物語」の時代で「どのよう」に民主主義によって合意を形成できるか」を根本的問題関心として研究しています。

皆が共有できる感覚を持ってなくなった「小さな物語」時代に共有できるものは何か。それは「不安」だろうと思います。例として、なんの統計的裏付けのない「現代若者凶悪化説」が横行し、また不可視化した近所付き合いが「近くに犯罪者が潜んでいる」という疑心暗鬼を生み出してきたように思えます。それにより、少年犯罪の厳罰化、警察官増員、監視カメラ設置などが議論され、実施されたものもありました。これらは「不安」に基づく合意であった、と言えます。私も「凶悪化する若者」の文脈を生きて

私の通う公共政策特別コースは社会人向けのコースであり、私のように大学卒業後すぐに進学させていただくのは本コース開講後、初めてのケースだそうです。同じコースで学ぶ方々との親と子ほどの年の差にギャップを感じつつも、本コースで学ぶ意義は「境界人」として自分の社会における役割を見つめることだと考えます。「境界人」とは、複数領域の境界に立つ生き方を指します。自分の属する組織や自分の価値意識に埋没することなく、さまざまな背景を持つ人々と接し、議論することによって、自分を相対化した観点を見つけていく。まさしく、多様な背景を持つ人々が集まる本コースは「境界人としての自分」を投げかけてくるコースであると言え、自分だけの「小さな物語」におさまりがちな現代に要請されたコースであると思います。(博士前期課程一年 公共政策特別コース)

大学院生の声②

生態・景観と環境管理分野
藤原 聖史

私が大学院を目指した理由は、大学院の先輩との繋がり、多くの研究者や指導者との出会い、そして岩手県立大学の充実した環境からでした。この恵まれた環境をより活かして、さらに深い知識と研究の経験を積み、自分を成長させたいという思いから大学院に進学することになりました。

私が現在取り組んでいる研究テーマは、遺伝子解析を用いた絶滅危惧植物の分類学的研究です。旧来の植物分類学は形・構造・色といった形態や生理機能などの形態的特徴に注目したものが主でしたが、分子生物学の発展により、DNAの塩基配列を比較する手法が中心になってきました。私の研究対象である植物群は、互いが形態的に非常に類似していることや、希少野生植物として指定、保護され、採集しにくいことが分類学的研究を

困難にさせていました。「いわてレッドデータブック」改訂に当た



現地での植物採集



遺伝子解析実験の1コマ

り、従来の形態的特徴に加え、遺伝子解析を用いて種(しゅ)の違いを解明することが研究の目標となっています。

博士前期課程の一年生の前期は、授業の合間を縫って岩手県の各地から研究対象となる植物の採集を行いました。今後は、形態調査と同時に、サンプルからのDNA抽出を行い、本格的な遺伝子解析に取り組みます。

大学院に入ってからは、学生のときよりも扱う内容が専門的になり、やる事が非常に多く、格段に忙しくなりました。そのせいか、時間の経過があったという間に感じられます。そのため大学院進学を考えている方は、大学院に入ってから研究テーマを考えるのではなく、進学前から自分の研究したい分野を意識しておく必要があると思います。また、研究では多くの方々のお世話になるので、事前に入脈を広げておくことも重要なポイントになると思います。(博士前期課程一年 生態・景観と環境管理分野)

おしゃまします 豊島正幸 ゼミ



試行錯誤もプロセス。卒論を通じて人間成長

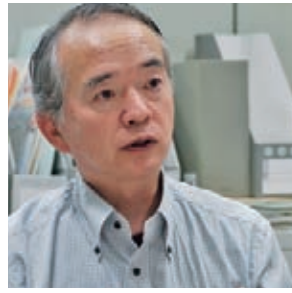
プロジェクトを用いた発表、展開されるディスカッション。卒論の進捗状況を確認する模擬発表会と聞いていたが、居並ぶ五人の学生は真剣そのものだ。そんな彼らに鋭く問い、時に熱く語りかける豊島教授。「何を切り捨て、何を打ち出すか。視点を深めつつプレゼン力を磨いてほしい」と、期待の大きさに比例するように指導にも力がかかる。豊島ゼミでは、卒論テーマは学生自身の関心を基に、その上でディスカッションを繰り返して、アプローチ法や視点を導き出していく。当然道りは長く、決して容易ではないが「試行錯誤も大事だから」と豊島教授。ご自身も、専門の自然地理学をベースに、初めて取り上げる現象に対しても「一緒に考える」と話す。そんな人柄に惚れた」と笑うのが、金矢圭太さん、佐藤優貴さん、田口裕介さん、沼田光さん、襲主翔さんら四年生。テーマは五人五様で幅広いところがあるがやはり豊島ゼミらしい。学業の傍らバレーボールやストリートダンスなど、それぞれが好きな事に熱く取り組む。そんな学生たちの「途でに共感する」と豊島教授。課題とするのは、「ゼミ力」の向上。ゼミ生の間で、質問や意見が言い合えてそれを聞き合える「場」づくり。そのプロセスを通して人間成長を」と豊島教授は願う。

豊かな行政経験で培った「視点」で 自然と環境教育の大切さを伝える

渋谷晃太郎教授

◆プロフィール

千葉大学園芸学部環境緑地学科を卒業し環境庁入庁、自然保護局のレンジャーとして各地の国立公園で保全管理を担当。また本省勤務時には環境教育に携わったほか、環境教育推進法基本方針の策定なども行った。香川県では自治体行政を体験、林野庁では森林吸収源対策やカーボンオフセット、森林セラピー等にも取り組んできた。また、在職中に放送大学大学院を修了した。



「学生時代から自然と関わってきて思ったのは、環境教育がいかに大切かということ。私自身、それが『やりたかった事』と気付いたんです。そう話す渋谷晃太郎教授は、環境省や林野庁などさまざまな行政現場を経て今年四月本学に赴任。環境分野の専門家として豊富な実務経験をもとに現代の環境政策を考察し、教育者として学生と行動し市民との交流も展開している。

渋谷教授が自然と深く関わるようになったのは、千葉大在学中、日本の生態学の第一人者である沼田眞氏の講義を聴き、先輩と尾瀬で自然解説員のアルバイトをしたのがきっかけという。そのとき指導官だったレンジャーに興味を抱いて環境省に入庁、日光を手始めに上信越高原（戸隠、知床、十和田八幡平、陸中海岸等々、全国各地の国立公園を巡り歩いた。「野鳥の宝

庫の戸隠で山地の野鳥を覚え、知床ではシマフクロウの巣箱がけなどの保護増殖事業に携わりました」。早朝のバードウォッチング、出会った動物や植物のこと、渋谷教授の語る各地での経験はどれも楽しい。思わず引き込まれる話術は、尾瀬時代に習得し、今もテーマを取り組んでいるインタープリテーション（自然解説）の一つのようだ。

そんな自然との関わりは、当時「豊島事件」で揺れていた香川県への出向や、その後赴任した林野庁の経験でより広い環境分野へ広がっていく。特に林野庁では、森林の炭素吸収量の算定と国際事務局への報告を担当、温暖化防止における環境保全の重要性を痛感した。「実は京都議定書で日本が約束した二酸化炭素排出削減6%のうち、三・八%は森林吸収で賄うのが前提です。しかしこの先経済活動が活性化すれば排出量も増え、特に市民生活からの排出が問題になってくる。究極をいえばライフスタイルの改革をしなければならぬですが、自由に行動できないなんて楽しくないでしょ。だからこそ、自発的な環境行動を促すための教育が必要になる。そのツールとしてインタープリテーションをはじめとする環境教育があり、「これからの研究者は教育にもさらに力点を置かなくてはならない」と渋谷教授は続ける。

ここ岩手でも、学生とともに市民や企業などへのコンタクトを始めており、最近は無農薬野菜の流通に取り組む若者グループと交流、「大事なのは市民グループや自治会のようなコミュニティレベルでの『環境マインド』を育てること」と話す。もちろん環境NGOやNPOなどの団体とも連携を図ってはいるが、ネットワークという点では環境団体も市民グループも変わらない。「固定化された価値観に浸っている団体からは、新しい『視点』が生まれて来ない」と渋谷教授は考えているからだ。

だからこそ学生へ望むことも明確だ。「あまりにも当たり前すぎて、岩手の自然環境の価値に気付いていない人が多い。新しい視点が生まれなければならないことは、そこにある『資源』を生かすという可能性があるのだから、できれば一回は外の世界を見に行く必要があると思う」。トリトリに閉じこもらず「外」を見に行く習慣を、そして考え方を持つこと。それは物理的な移動に限らず県内においても保つべき意識だと、自ら行動することでも渋谷教授は伝えている。

NEW Intelligence

日本農業の問題と展望について考察。 岩手の持つ価値に気付いてほしい

新田義修講師

◆プロフィール

文教大学国際学部、北海道大学大学院農学研究科・農業経営情報学研究室終了。北大時代に北海道農業の現状と課題を調査・分析をし、政策提言として報告書を作成。また特別研究員として国際稲研究所（IRRI）に滞在、日本の技術貢献の結果を調査した。静岡ではビジネス経営体（企業の大規模借地経営体）の育成に関わっていた。



岩手県の主要産業の一つが農業であることは、県民なら誰でも知っていること。だが産業としての実態やそれに伴う課題について、果たしてどの程度理解しているだろうか。「岩手県は兼業農家が多く、専業や担い手が少ないです。ただ県農政部を中心に農業改良普及センターや農業研究センターなど農家をバックアップする組織配置が手厚く、恵まれているといえるでしょう」。きっぱり答えてくれた新田義修講師は、静岡県農林技術研究所の技師職を経て本学に赴任。農業経営学や農業経済学の研究者として、本県の農業分野の考察とその提言に期待が寄せられている。

大学時代の専門は国際関係論だったという新田講師。だが英国留学で旧ソ連諸国の貧困を知り、唯一の経済再生が農業振興と確信。北海道

大学大学院へ進み、農学研究科で開発経済と農業経営学を学んだ。特に北村（現岩見沢市）のフリードワークでは、負債額から後継者の有無までヒアリングした上で専業農家のリアルな現状を報告。「北村での経験は一生の宝」と話す。

その後はフリーピンで灌漑施設の維持管理に関する研究を、モンゴルでは遊牧経営に関する研究を行い、静岡ではビジネス経営体（大規模経営体）の育成に必要な収益形成条件の解明に取り組むなど、日本の実態に即した研究に力を注いだ。「人口減に転じた日本では農業の大規模化はもはや必須。農地再編の仕組みを作り、『儲かる農業』の手法を考えていかないと荒れ地ばかり増える」と警鐘を鳴らす。農業がGDPに占めるのはたった1%という事実、そして公務員削減で真っ先に切られていく自治体の農業経営専門職……。突きつけられる現実に「農業は大事」は政府の謳い文句に過ぎないのかと落胆するが、新田講師は「岩手には組織が残っているし、大企業の進出もないから地場の農家が頑張れる環境がある」と話す。そんな岩手の農業経営で注目すべきなのが産直施設であり、「栽培作物の転換や消費者ニーズの吸い上げなどにも重要な役割を果たす」と新田講師。すでに滝沢村の産直を検証しているが、兼業農家がインシアチブをとって産直を牽引しているのは全国的に珍しいのだとか。今後は奥州市にもフィールド調査に赴き、水田農業を調査しながら地域全体の産業の在り方を検証するという。

「岩手県は人間関係が密で家族を大事にする社会。そこを調べていけば『ソーシャル・キャピタル』、つまり岩手ならではの長所やお金では測れない価値が見えてくると思う。そこを自分の研究のオリジナリティとして発展させていければ」と。ソーシャル・キャピタル＝人間の信頼関係がもたらす協働行動が社会を活性化させるという概念は、フリーピン時代、新田講師が人々の関係向上などに用いていた手法と見直すこともできるのが、この総合政策学部によさだとも。

「学生の皆さんには、まず『これをやりたい』という明確な目標を持つしてほしい。そして総合政策にはさまざまなポテンシャルを持った先生方がいるのだから、その知識や手法を使ってやるうらぐらい思うべきです。準備はすでに整っている。『門』は開かれています」。

研究最前線

けいりょう政策学へのご案内

高嶋 裕一



研究の最前線あるいは最先端といっても、それはニワトリのくちばし程度の先端であるというのが普通だ。つまり、他にそれについて考えている人が周りにいないとき、意図せずして最先端になってしまうものである。

ある水曜日の夜、私はいつものようにアイーナに行った。大学院の計量政策学講義のためである。「計量」というとちょっとおっかない感じがするが、「軽量」と言い換えてみたら少し気が楽になります。今学期集まったのは、Wさん、Kさん、Uさんの若手3人組。一応、授業計画には小難しいことを書いておいたが、ひるまずにやってきた。えらいと思う。私のほうはというと、受講者にできる限り合わせようという魂胆なので、最初はあまり準備しない(ケッシテサボッテイルワケデハナイ)。自己紹介や雑談が終わったあと、さて今学期は何をしようか、という話になった。

Wさん(あるいは別の誰かだったかもしれない):「盛岡市の高齢者福祉とまちづくり、をやりたい。」

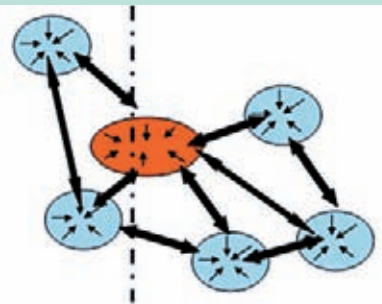
他にも観光政策という話があったが、こちらは難しそうだ、ということで、一同、Wさんの意見に賛成した。このテーマが浮上り、私は内心シメシメと思った。以前、盛岡市のまちなか居住に関する調査をしたことがあって、そのときのデータが使えるのではないかと、思ったからだった。

次にどうやって進めるか、という話になった。

私:「やるからには成果物(「ワーキングペーパー」と言います)も作りましょう。4人連名の共著論文にします。」

この方式は前に試みたことがあって、目算はあった。目標が出来たことで、一同は満ち足りた気分で帰宅の途に就いた。

「高齢者福祉とまちづくり」というのは、実際おもしろいテーマだ。このテーマはいま流行の「コンパクトシティ」という考え方につながる。ここで「コンパクトシティ」について、



さらっと述べておこう(図: Kさんの書いたコンパクトシティのイメージ)。簡単に言うと「持続可能なまちづくり」ということであり、マイカーを使わずとも歩ける範囲で日常の用が足せる、という

まちのことだ。(どうでもいいことだが、コンパクトシティの概念を最初に提唱したのは、オペレーションズ・リサーチの分野で有名な人たちだ。しかし、この最初の概念=3次元空間の有効活用は、今日のコンパクトシティと大幅に違う。)

2日目

翌週、私は論文の骨…ではなく皮だけを作って持ってきた。一応の表題(「『高齢者に住みよいまちづくり』の政策分析—盛岡市を対象として—)と論文の出だしの文章、何ページぐらいにするか、おおまかな目次だ。内容は毎回の授業中のディスカッションで少しずつ埋めていこう、ということになった。次に「高齢者にやさしいまちづくり」とは何か、という議論になった。ホワイトボードを使って、自由に意見を出していく。こういう時間は共同研究の醍醐味と言えるでしょう。意識合わせもできるし、なにより楽しい。そのうち、以下のような定義が出来上がった。

「高齢者に住みよいまちづくり」とは、高齢者の多様な生活状態に応じたニーズが充足されやすい都市環境を整備することである。ここで言う都市環境の整備とは施設等の整備ばかりではなく、制度・しくみの整備も含むものである。

当たり前のようなことが書いてあるけれども、実はこれが研究で一番重要な部分だ。他にこういうことを書いている論文が見当たらないから。他にもいろいろと頑張った点があるのだが、残念ながら紙幅も尽きた。あとは現物(図:ワーキングペーパー!)を見てもらうことにしよう。

成果物にはこんな意義がある。完成を目指すという具体的な目標ができる。意識すり合わせの焦点ができる。出来上がったなら、宣伝パンフレットになる。反対者にとっては批判の対象となる。難しい問題だということがわかったら、分割し、簡単なところを論文にする。



最後に、日ごろ感じたことを。大学の地域貢献にはいろいろなタイプがあると思うが、研究の意欲と研究の課題を抱えた人々が集まる場をつくるというのが私には好ましく思える。集まる場は大学がつくらなければならない。この場合は大学院授業という仕組みとそれを実際行う場所と時間だった。ここで集まりにくいと、効率が悪い。参加者が研究の意欲と研究の課題を両方持っているのが理想だ。今回はまさに理想どおりだった。

我々は、今は関連するが別テーマで第二の論文に取り組んでおります。

(本学部准教授・計量政策学)

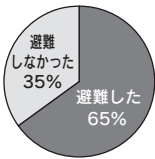
チリ津波避難における住民の行動

今年二月二八日に発生したチリ地震津波は、二四時間もかけ太平洋を横断し日本列島に到達、太平洋沿岸に住む住民約一二十万人に避難指示が出されるなど、重大な影響を及ぼしました。

内閣府発表資料によると、実際に避難所に避難した人は全国平均で二・八％と、とても低い避難率でした。避難の呼びかけから津波の到達まで四時間近くの時間がありました。それだけの余裕があったにもかかわらず、本当に多くの人は逃げなかつたのでしょうか？

その結果、多くの住民は、寒い野外の指定避難所を避け、知り合いの家や買い物、ドライブなどで安全な地域に移動していたことが分かりました。それらを含め、改めて避難者数を数えると、六〇％以上の住民がなんらかの避難行動を取っていたことが分かりました。また、多くの住民は避難の必要性を行政から得てきたこと、配布されたハザードマップが全く使われていなかったことなどが分かり、今後防災対策を考える上での課題が明らかになりました。

(伊藤英之 本学准教授・自然災害科学)



住民の避難行動

西出准教授 学長表彰受賞!



表彰式の記念写真

今年三月の学長表彰で本学部の西出准教授が、受賞されました。これは研究や地域貢献などで著しい成果を挙げた方を表彰するものです。

西出准教授は、「日本評価研究」誌九巻で発表した論文「国立大学法人評価制度の理論的考察―制度設計上の目的性と機能可能性―」が、日本評価学会二〇〇九年度論文賞を受賞したことを評価され、学長表彰を受賞されました。日本評価学会の論文賞は、学会誌に掲載された論文のうち、評価学研究に大きく貢献したと認められた論文に対して与えられるもので、この二年は受賞者がありませんでした。

受賞した論文は、法人化された国立大学の法人評価制度を理論的に考察することで、法人評価における制度設計上の問題点について論じたものです。

岩手県立大学生協新設!

昨年八月に岩手県立大学生協の創立総会が行われ、今年一月に購買(売店)と食堂がオープンしました。大学生協では、学生・院生や教職員が各々出資金を出して組合員となります。

組合員になると、売店や食堂で利用した金額に応じたポイントが加算され、そのポイントが還元される仕組みになっています。また、住宅探しやアルバイト情報などの学生生活サポートのほか、公務員試験対策講座や資格取得に関するサポートなど、幅広い分野のサービスが提供されています。

こうしたサービスは大きな魅力ですが、大学生協の重要な特徴は、組合員による自主的な組織であるという点でしょう。大学生協は組合員の出資金によって運営され、同時に、大学生生活・環境をより良くしていくため、組合員が自ら運営に参加していく組織なのです。

県大生協は、オープンから半年以上が経過し、すっかり本学には欠かせない存在となりました。とくに昼食時間に近くなると、作られたの「あつこさん弁当」が人気です。今後いっそう、「私たちの」県大生協を盛り上げていきたいものです。



昼食時の食堂

西和賀町湯本活性化プロジェクト



ワークショップの様子

栗田ゼミは平成二〇年八月の西和賀町のまちづくり調査が縁で、湯本地区の活性化をお手伝いするようになりました。湯本地区は町産業の中心地でありながら、かつての華やかな温泉街の面影は全くなく、住民のごく一部に地区再生に対する気概はあるものの、複雑な利害関係もあって、その第一歩が踏み出せませんでした。

私たちは月一回ペースで現場に入って、地区住民とワークショップを行っていますが、当初、区民の参加はわずかで、各々夢は語るものの、地区区民で共有すべき短所(とくに身近な問題)を見つけられず、その発見・分析に多くの時間を費やしました。

区民と主体的再生に取り組むうちに、参加者に何か仕掛けようという思いが芽生え、参加人数も回を重ねるごとに多くなりました。中止の危機もありましたが、二年二月に「湯もつともつ」おもてなしフェアを実施するまでに至り、温泉を中心とした地区再生の出発点に位置づけた「おもてなし」を強化しました。「フェア」以降、看板・案内板の見直しを始めに、さまざまな「足もと」の課題」に取

り組んでいます。地区全体では、依然「自分さえ良ければ」という意識が強いですが、小さな成果の積み重ねを通して、一人でも多くの方々が積極的に参加し、大きな成果に結実するようにお手伝いを継続していきたいと思っています。

(本学部 准教授 栗田恒馬)

私は本プロジェクトには毎回参加しています。最初、地区住民のまちづくりに対する危機感は薄く、「〇〇が悪い」と言っ他人に責任を転嫁する姿が多く見受けられました。また、「一歩ずつ着実に前進」という栗田先生の姿勢に敬しい言葉がかけられる場面もありました。しかし、回を重ねるたびに「自分たちに何ができるのか」「地区の短所・長所は何か」と真剣に考えるようになりました。他方、私は勉強不足のために参加者の意見をまとめられない場面にも何度か直面し、悔しい思いがしましたが、先生や支援者(町役場・商工会など)からご指導と励ましの言葉を多くいただき、成長できたと感じます。「フェア」の際には、みんなの思いを形にしていく重要性を学びました。今後も活力ある地区づくりが住民の努力で進められていくことを期待します。

(本学部 四年 高橋竜介)



湯本「雪あかり」作品

風のイベント達

大学と地域を結びイベントを企画。動くことで人との繋がりが生まれる

3年 岩瀨 沙紀さん

今年3月、岩手県民情報交流センターで行われた「アイーナにコイーナ」。県立大生自身が学部を越えて学生活動の成果を発表するというイベントを企画、仲間とともに運営したのが岩瀨沙紀さん。「企画するのは本当に大変。でも、動くことで人との繋がりのすごさを実感できるんです」。あふれる好奇心と情熱・バイタリティーの強さは、きらきら輝く瞳を見ただけでも分かる。

事実、岩瀨さんの学生生活は動くことで広がってきた。1・2年では学祭実行委員会に参加、終了後「まずは何でもいから次のステップ探し」の中、NPO主催の地域通貨関連セミナーへ出席する。場違いに緊張しつつ参加したそのセミナーで「出会いの大切さ」を実感したのが、岩瀨さんの第2のスタート。



12月には慶應義塾大学と県立大が合同で行った釜石市フィールドワークに参加、初対面の人々と積み上げていくプロジェクトを楽しみ、他学部の県立大生とも知り合った。そし

て翌2月には、前述のセミナーで出会った県立大OBの協力を得て「IPUSノーツアー」を企画、スポーツとネットワーク作りを目的にスキー場で行ったイベントには、他学部の学生も参加した。「支えられているから、さまざまなことができる」と感謝を忘れない。

現在は、釜石でのフィールドワークをきっかけに知り合った県立大の仲間と「地域プロジェクトチーム LINK@」を結成、7月のオープンキャンパスでは学生活動を紹介する「県大にコイーナ」を開催した。「みんなとは普段の会話の中でアイデアや企画が生まれる。学部もプロフィールもバラバラなメンバーだから、逆にこういうことができるんじゃないかな」。プロジェクトチーム名の「@」は、ツイッターで特定の相手に向けたツイート（つぶやき）を発信する時の記号。「思い」を共有できる人との繋がりを大切にしたい、そういう思いが込められている。

今はLINK@に全力投球の岩瀨さん。だがさまざまな活動のなかで少しずつ、将来やりたいことも見えてきたという。「今までの活動を通して表現できる自信はある。でも、まずは単位取らなくちゃ、って」(笑)。

少年ボランティア活動を通して話すこと、繋がりの大切さを実感

3年 高橋 亮貴さん

大学1年生の秋に届いた1通のメール。それが、高橋亮貴さんがボランティアグループ「るうだんて」に参加したきっかけだ。「ちょうど『何かやらなくちゃ』って、ゼミ冊子作りに参加していた時。やる気が出てきたところに、あのメールはとて素晴らしいタイミングでした」。根底にあったのはボランティアへの好奇心、そして自分自身の可能性を探ること。「20歳といえば社会的には大人。僕らの上の世代には何もできないかもしれないけど、下の世代には教えられることがあるかもしれないと思って」。現在はグループの代表として、

約30人の仲間とともに活動している。

「るうだんて」は盛岡東警察署の協力の下、少年非行防止と少年健全育成に取り組んでいる。活動は学校での万引防止教室や町内会イベントの



手伝いなどさまざま。なかでも継続している児童養護施設の訪問は、高橋さんにとって特別な思いがある。「入所しているのは乳幼児から高校生の子どもたち。そこは一つの家みたいな環境だけど、外の人間はなかなか受け入れてくれない感じがあった」。それがボランティアに対する警戒心と、高橋さんは気付く。「多くのボランティアは続けて来てくれないし、行くたびに顔ぶれが変わる。僕たちは、それをしないようにしたんです」。定期的に同じメンバーで訪問し、徹底して子どもたちに話しかけた。今では高校生からも声をかけられ、一緒に食事をするこも。今年6月には子どもたちや警察職員らと一緒にクッキー作りを行い、さらに県警本部長から委嘱を受け「少年サポート隊」の隊員として、不登校に悩む中・高校生の勉強支援も行うなど、活動の幅は拡大中。「気分は親戚のお兄ちゃん」、そう話す笑顔には、すでに逞しさも覗く。

所属する山田佳奈准教授のゼミでは、地域ブランドについての研究を計画中。テーマの絞り込みはこれからだが「実はクッキー作りの時、子どもたちと一緒に地域の特産品を作れるかもしれないと思ったんですよ」。ボランティア活動と地域ブランド研究。活動のベクトルは違っても、高橋さんの根底には「繋がり」を大切にしている心がある。

情報数理と政策①

政策を学ぶのに、なぜ数理が重要なのか？

はりこめ 堀籠義裕

総合政策学部では、統計学などの数学関連の情報数理の科目が実習と同様に重視されていることは、ご存知の方も多いと思います。しかし、情報数理を重視する狙いについては、よく分からない方が多いのではないのでしょうか？そこで今回は、情報数理に関連する複数の実習（シミュレーション技法実習、社会調査実習）の担当として、情報数理の狙いや意義について述べてみたいと思います。

情報数理の狙いを一言で言えば、社会現象を分析するための数理的手法の仕組みや考え方を理解し、それらを適切に用いる能力を身に付けることにあります。本学部には統計学や基礎数理などの講義形式の科目のほか、行政・経営コースには「実習」となっている科目もあります（ゲーム理論実習・シミュレーション技法実習・多変量解析実習）。

高度な数理的手法には、コンピュータの専門ソフトの利用が一般的なものも多くあります。しかし、本学部ではこれらの手法の理解に

あたり、頭や手を使うアナログの作業を主な手段とすることが多いのが実際です（実習の事例はMONTO18号および19号「実習を究める」を参照）。パソコンやソフトの「使い方」はいずれ役に立たなくなりますが、高度な手法の「ブラックボックス」の中の仕組みや考え方の理解は、パソコンやソフトが発達しても未永く役に立ちます。数理的手法の仕組みや考え方の理解は、報道などで公表される既存の数値的な情報の「作られ方」や「解釈のされ方」の妥当性を適切に評価し、情報を取捨選択するための土台でもあります。

なお、情報数理の知識は、その場限りで完結するわけではありません。例えば行政・経営コースの社会調査実習では、統計学や社会調査法などで既に学んだ知識を場面や状況に応じて適切に応用する、総合的な実践力が問われます（環境・地域コースで数値データを扱う実習もほぼ同様です）。グループでの調査活動の作業の中で、先に述べた総合的な実践力のほか、知識の更なる深化に向けた自助努力、あるいは調査対象の「社会」の本質を適切に把握する知的態度・能力といった、社会調査の実践に関する対外的な競争力の見極めが行われます。また、その後の卒論でも、(数値的なもの以外も含め)情報を適切に扱う能力が問われます。

情報数理は数理的手法の学習自体が目的なのではありません。その後の実習や卒論、あ

るいは卒業後の仕事や生活の中で、既存のさまざまな情報の中から批判的な吟味の上で良質なものを取捨選択したり、良質な情報を自ら生み出していくための訓練なのです。社会問題の本質を的確にえぐり出し、根本的な解決策を模索する力を鍛えるのが、情報数理およびそれらの知識の実践を伴う実習のもう一つの狙いと言えます。

成熟社会・分権社会を迎え、わが国や、岩手県を含むわが国の地域社会には、もう先に行くお手本はありません。民間・公共を問わず、前例のない、多様性に富んだ課題に対して限られた諸々の資源を有効活用し、自助努力で解決策を模索しなければなりません。そのためには、安易な他人の真似事ではなく、問題の本質を論理的・分析的に把握し、根本的な解決に向けて模索できる人間を、社会のさまざまな立場の人たちの中にバランスよく散りばめておく必要があります。情報数理やそれらの知識の実践を伴う実習は、そのための手段なのです。一般住民や企業、あるいは行政を含めた地域コミュニティの中に、問題解決のための「触媒」となる人材を散りばめることで、地域の活性化を下支えすることを狙う「政策」と言えるかもしれません。

(本学部准教授・政策分析論)

アイーナ講座のご案内

日米の緊張が高まっていた昭和初頭、米国人宣教師の提唱で日本に多数の人形が送られてきました。「青い目の人形」です。これに対して日本からも答礼人形が送られました。

こうした民間レベルでの日米交流にもかかわらず、一九四一年、日本は米国との太平洋戦争に突入しました。米国の日系人は強制収容所に入れられ、苦難の道を強いられます。そんな日系人に盛岡出身の浅野七之助氏がいました。

戦後、祖国・日本の窮状に心を痛めた浅野氏は日系人社会を中心に食糧物資や資金提供を呼びかけました。これが「二つ物資」です。

戦前・戦後の日米交流を中心に、専門家による講演会を標記のように企画しました。米国からは浅野氏のご子息のタダシ氏をお迎えし、お話をうかがいます。

■太平洋戦争前後の日米交流 ～岩手の記憶～

場所: アイーナキャンパス 学習室1

▲第一部 日米交流の証し

日時: 11月18日(木) 15:00～17:00

1. 高岡美知子(前武庫川女子大学教授)
『人形は語る 伝えるは人間』
2. 魚住恵(県立大学盛岡短期大学部教授)
『ララ物資と学校給食』

▲第二部 もうひとりの太平洋のかけはし

日時: 11月25日(木) 15:00～18:00

1. 鎌田聖美(盛岡市先人記念館学芸員)
『新渡戸稲造から浅野七之助まで』
2. Tadashi Asano
通訳: 佐藤智子(県立大学教授)
『日米交流に努めた岩手の先人・浅野七之助』

主催: 総合政策学部/共通教育センター/盛岡短期大学/地域連携本部

岩手の地形①

街並みに見える北上川の名残 吉木 岳哉

盛岡の中心商店街である大通商店街も他都市と同様に買い物の減少が指摘されているが、それでも他都市に比べれば賑わいを保っている。現在の北東北では最大の商店街と言えるだろう。そんな大通商店街をかつては北上川が流れていた。正確に言うと、かつて北上川が流れていた場所が大通商店街になった。

盛岡城(現岩手公園)が築城された当時、北上川は現在の開運橋上流からクロステラス、大通商店街を経て、盛岡城の西面を洗うように流れていた。盛岡城は、西側を北上川、東～南側を中津川に囲まれた天然の要塞だったのである。しかし、これは、穏やかな北上川ならば、の話である。実際には北上川の洪水に悩まされたため、現在の旭橋・開運橋間に堤防を築き、北上川の流路は人為的に遠ざけられた。水の流れが途絶えた北上川の流路跡は、周囲に比

べて土地が低く、水はけも悪いため、水田としてしか利用されなかった。この場所が埋め立てられて街になるのは昭和初期まで待たねばならず、その後、現在の大通へと発展していった。

ここを北上川が流れていた名残は今でも確認できる。碁盤の目に道路が交わる大通地区にあって、それらと斜めに交わる細い道路がある。その道路の北側は、南側よりも少し高くなっているはずである。分かりやすいのは、金田一駐車場と食道園の間の段差だろう。写真のように、



金田一駐車場の段差

大通側から金田一駐車場に行くには階段を上らねばならない。この段差は、かつての北上川の岸辺の名残である。上空から見れば、曲線的な道路が連続しているのが分かる。この曲線が昔の北上川の岸辺である。

川ならば岸辺は2本ある。現在の大通北側は北上川の左岸にあたる。反対側の右岸は? と言うと、ほとんど識別できない。蛇行する川では、外側の岸辺が侵食によって急崖になり、内側は砂などが堆積して緩やかな斜面になる。そのため、内側の岸辺の跡は残りにくい。砂などが堆積している内側部分は流路跡と異なり、水はけが良い。そこが何に利用されたか? その歴史は現在の地名に残されている。野菜を作る畑として利用されたその場所の歴史は「菜園」という地名に残されている。(本学准教授・自然地理学)



●ご意見をお待ちしています

MONTOへのご意見・ご感想・ご要望は、氏名、住所、電話番号を明記のうえ「総合政策学部広報・交流委員会」宛てで、下記連絡先まで。電子メール送付(monto@iwate-pu.ac.jp)でも構いません。よろしくお願いたします。

MONTO

●【MONTO】岩手県立大学総合政策学部ニュース Iwate Prefectural University
●第24号: 2010年(平成22年)10月23日 ●発行: 公立大学法人岩手県立大学総合政策学部
〒020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字菓子152-52
代表TEL019-694-2000 学部019-694-2700 FAX019-694-2701(学部事務室)
印刷/株式会社社陵印刷 TEL019-641-8000

《MONTO WEB版》URL

http://www-poly.iwate-pu.ac.jp/monto/index_monto.html

*岩手県立大学のホームページ <http://www.iwate-pu.ac.jp/> から総合政策学部をクリックして、次に「学部機関紙MONTO」をクリックしてもアクセスできます。

●編集後記

▼特集記事を読んでいて、自分の院生時代のことを思い出しました。よく飲み、よく議論しました。多数の学生が大学院に進み、切磋琢磨し自己を高めていった欲しいと思います。(余) ▼長い夏休みが明けて、コースの選択、研究テーマの絞り込み、就職活動の本格化、そして卒業研究へと、それぞれに岐路を迎える学生諸君。健闘と卒業を祈る!(T) ▼暑かった夏も過ぎ去ってしまおうと寂しくなります。人間って勝手だね。この秋には本学部ウェブサイトの更新を目指しますよ。これまで全然リニューアルしてなかった(丸丸虫) ▼卒論執筆中も大学院生時代も、最終段階では「体力」と「気力」と「勝負」でした。それを支えたのが「食欲」。大学生協も大いに活用して体力を蓄えておきたいですね。(V) ▼今思えば、大学院修士課程(二年間在籍)では本当にたくさん研究できた。大きな財産だ(TKO) ▼新しい連載が二つ始まりました。情報数理解と政策1と「岩手の地形」です。いずれも読み応えのある読み物になるでしょう。今後にもご期待ください(なこ)

●編集スタッフ▶金子与止男(編集責任者)・山本健・高嶋裕一・山田佳奈・柴田但馬・島田直明